

アンリ・ルランベールの下絵に基づくタピスリー連作〈コリオラヌスの物語〉
—《家族を迎えるコリオラヌス》を中心に—

竹本芽依（東京藝術大学）

プルタルコス『対比列伝』やリウィウスの『ローマ建国史』等によって知られる、古代ローマの将軍ガイウス・マルキウス・コリオラヌスをめぐる物語は、フランス国王アンリ 4 世の注文を受けて、タピスリー連作〈コリオラヌスの物語〉（17 世紀初頭に構想と最初の製織、作例はフランス国有動産管理局等に所蔵）に織り上げられた。本連作は、10 点の大型タピスリーと 7 点のアントルフネートル（窓間飾り）の計 17 点から成る。下絵は 1600 年に国王付きタピスリー画家に任命されたアンリ・ルランベール（1540/50-1608）に帰属されている。

M. フナイユによる基礎研究（1923）以降、本連作は研究者の注目をあまり集めてこなかったが、近年、P-F. ベルトラン（2005）や I. ドニ（2010）による論考が発表された。しかし、先行研究の関心の中心は主題特定や下絵作者についてであったため、作品自体の詳細な分析や、制作意図に関する考察は十分であるとは言い難い。ベルトランは、本連作におけるコリオラヌスの祖国愛や、民衆の忘恩に対する正当な復讐を肯定的に捉え、その生涯や軍事的手腕は、アンリ 4 世の経歴を連想させると指摘した。一方ドニは、本連作には国家反逆に対する警告が込められていると解釈し、フランス大元帥に就任するもアンリ 4 世を裏切り、処刑されたシャルル・ド・ゴントー＝ピロンが、コリオラヌスの姿に重ねられたらと述べている。本発表では、連作全体の主題選択を確認した上で、《家族を迎えるコリオラヌス》（以下、本作）を例に挙げ、歴史的背景を視野に入れた図像的考察から、その制作意図を再考する。

本作には、それまでの図像伝統にはほとんど先例を見出すことのできない、コリオラヌスが自ら母ウェトゥリアのもとに駆け寄る様子と、毅然とした立ち姿で息子と対峙する母親が描かれている。発表者は、この表現はボッカッチョの『名婦列伝』に着想を得ていると考える。ゆえに本作では、コリオラヌスの改心よりもむしろ、息子を説得して正しい判断へと導いた、ウェトゥリアの功績をたたえることが試みられていると推察される。

本連作に関する最初の史料上の言及は、1606 年にフォンテーヌブロー宮で行われた、アンリ 4 世とマリー・ド・メディシスの子どもたちの洗礼式の際、王太子ルイ（のちのルイ 13 世）の寝室に飾られたという記録であった。つまり本連作は、1600 年の国王とマリーの結婚、そして翌年の待望の世継ぎの誕生と時を同じくして構想されたと考えられる。本作で描出された威厳ある母親像は、本連作と同時期に製作された、マリー・ド・メディシスに捧げられたタピスリー連作〈アルテミシアの物語〉における、女王アルテミシアの姿とも重なる。こうした状況を考慮に入れば、本連作では、未来の君主に向けた教訓的メッセージ、さらにその母親の美德が示唆されていたと解釈できるのではなかろうか。